

令和5年度 寄宿舍グループのまとめ

1 研究主題 「一人一人の自立に向けた生活支援の在り方」

2 研修内容

	日時	内容
第1回	5月12日（金）	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について
第2回	6月19日（月）	協議 ・実践事例様式とグループの視点について ・障害種別研修会の講師と講話の内容について
第3回	7月7日（金）	事例検討（1名）
臨時	7月24日（月）	事例検討（2名）
第4回	8月8日（火）	障害種別研修会「児童生徒のこころの理解と支援」 富山県こどもこころの相談室 カウンセリングオフィスこころのおと 臨床心理士 深澤大地 氏
臨時	8月21日（月）	事例検討（3名）
第5回	9月15日（金）	事例検討（2名）
第6回	10月13日（金）	連絡 ・実践事例起案の流れや学校訪問研修会について
第7回	11月10日（金）	協議 ・学校訪問研修会グループ別研修会の協議内容と進め方について
学校訪問	11月17日（金）	協議 ・児童生徒の自主性と身に付けた能力の般化を促す支援について
第8回	12月8日（金）	協議 ・今年度の研究のまとめ ・専門性セルフチェックシートについて
第9回	1月12日（金）	協議 ・次年度の研究方針について
第10回	2月9日（金）	協議 ・次年度の研究の進め方について

3 今年度のまとめ

近年、舎生の障害の重複化や多様化の傾向がみられる寄宿舍では、キャリア発達と生活の視点から個に応じた指導の充実を図ることが、舎生一人一人が目指す社会自立に向けた能力の育成につながるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

各々が一実践に取り組み、事例検討会を設けたことで、舎生の実態や課題を多角的に把握し、支援の工夫や結果を共有することができた。そして、将来の自立につながる、舎生の自主性の喚起や身に付けた能力の般化を図るためには、活動の必要性の理解を促す支援やタブレット端末等の活用方法について関係者間の共通理解が効果的であると再認識した。また、本グループにおける専門性の維持・向上には、舎生の生活上の困難やニーズの把握に向けて、眼疾患や見え方への理解を更に深める必要があると思われる。2年次では、今年度共有した支援方法や課題を踏まえて取組を継続し、個々の障害の状態や特性に応じた支援の在り方を、更に追究していきたい。

4 次年度に向けて

2年次も「一人一人の自立に向けた生活支援の在り方」を主題として掲げ、取組を継続する。

研究の進め方については基本的に今年度同様とするが、キャリア発達の視点と生活の視点との区分けが難しかったという意見や、眼疾患や見え方についての理解を深めたいという意見が複数あったため、2年次では実践事例の様式をキャリア発達の視点のみ、もしくはキャリア発達と視覚障害の視点へと変更し、実践事例の様式に記入する際は、双方を分離せずに記入する。

令和6年度 寄宿舍グループのまとめ

1 研究主題 「一人一人の自立に向けた生活支援の在り方」

2 研修内容

	日時	内容
第1回	5月10日(金)	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について
臨時	5月20日(月)	研修 ・視覚障害者の食事について(体験)
第2回	6月14日(金)	研修 ・対象児童生徒の眼疾患について(障害特性の理解と実態把握) ・見え方の体験、点字、歩行、生活動作
第3回	8月30日(金)	障害種別研修会兼寄宿舍合同研修会「災害時における体と心のケアについて」 日本赤十字社富山県支部 健康安全係長 林 亜伊子 氏
第4回	9月13日(金)	事例検討1回目(全員)
第5回	11月1日(金)	事例検討2回目(全員)
第6回	12月13日(金)	協議 今年度の研究のまとめ
第7回	2月 日()	協議 次年度の研究について

3 今年度の成果と課題

昨年度の研究から、将来の自立につながる舎生の自主性の喚起や身に付けた能力の般化への支援の重要性について再認識できた。専門性の維持・向上では、舎生の生活上の困難さやニーズの把握に向けて、眼疾患や見え方への理解を更に深める必要があることが課題として残った。

今年度の研修会で、アイマスクや視野欠損の体験用メガネを着用して寄宿舍内を歩く疑似体験をしたり、NHKの番組から視覚障害者の生活の様子を視聴したりすることで舎生の見え方や見えづらさについて学び、舎生の支援について共通理解を図った。身だしなみの習慣化を図る取組では、身近にある携帯電話のカメラ機能を活用し画像を見て確認する方法にしたことで、興味が深まり家庭でも実施する様子がみられた。身辺処理のスキルを身に付ける取組では、舎生が普段使用している玩具を活用することで興味をもって取り組み、学校や家庭でもその様子に変化がみられた。できる力を引き出す方法の工夫の重要性を実感する実践となった。一方で、寄宿舍でできるようになった日常生活動作を習慣化し家庭での般化につなげることが課題となった事例があった。今後に向けて保護者と連携を図りながらすすめていきたい。

4 研究のまとめ

研究を通して、舎生の眼疾患や障害についてだけではなく、それらに起因する状況が生活をする上でどのような困難さにつながっているか、家庭環境など舎生を取り巻く状況を含めた実態把握、生活支援が大切であることが分かった。昨年度の学校訪問研修では、将来を見据えた目標設定の際のポイントについて舎生の気持ちを大切にしながら支援をすすめることや、継続して取り組んでいくためには、舎生自身が必要性を感じたり指導員もその必要性について伝えたりすることが大切であると、指導主事から助言を頂いた。

寄宿舍が舎生にとって安心感があり落ち着いて過ごせる場所となることを目指し、学部や家庭と連携する中で寄宿舍として担う役割は何かについて、指導員は今後も専門性を高め、舎生一人一人の自立に向けて学び続けることが大切である。